
お試し番 バカとテストと海賊

FOOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お試し番 バカとテストと海賊

【Nコード】

N4496Z

【作者名】

FOOL

【あらすじ】

思いつきでやってしまいました。ボクと皆とバカテスト日常のキャラをゴーカイジャーに当てはめてみたものです。

ミズキの場合

……わたくしがその光景を目撃したのは偶然でした。宇宙帝国ザンギャックの目から逃げているうちに廃墟にたどり着いたようです。……これからどうするかそんなことを考えていた時に、争いあつような物音が聞こえて来ました。不審に思い、近づいてみました。そこで目撃したのはザンギャックの下級兵　ズコーヴィン達と4人の戦士の戦闘だった。その戦士達は剣と銃でズコーヴィン達を斬り伏せ撃ち抜いていく。ズコーヴィンの誰かが落としていた手配書から彼らが宇宙海賊だとわかった。

わたくしはその手配書を見て、あることを思いつき、彼らに声をかけていた。

「お待ちください。」

「誰だ？アンタは？」

青い服を着た小柄な女性がわたくしに問いかける。

「わたくし、ミズキキッド＝ファミーユと申します。」

その言葉に皆は驚いていたようです。

「……ファミーユって少し前にザンギャックに滅ぼされた、」

「はい。そのファミーユ星の王女です。」

「……………で、その王女様が、僕達海賊に何のようなの？」

「わたくしをあなた方の仲間になりたいのです。」

赤いコートを着た方の問いの答えに、呆気に取られたらしい。

「あんた本気？おままごとじゃないのよ？」

「はい。それは良くわかっています。」

「……………何で僕達の仲間になりたいんだ？」

「故国を失っても、ザンギヤックと戦っている方もいます。わたくしはその方々の励ましになりたいのです。」

「そんなの、わざわざ海賊にならなくても、いくらでもあるでしょ？」

「いいえ。海賊だからこそ良いのです。」

青い服の少女の問いに先程の手配書を見せて答えました。

「海賊になれば手配書にわたくしの顔と名前が載ります。ファミーユ星の方ならそれを見て、励ましになるかと思えます。」

わたくしの言葉に赤いコートの方が、笑顔を見せて答えました。
「気に入った。今から、お前は僕達の仲間だ。」

コウタの場合（前書き）

感想いただきました、鳴神 ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

コウタ「第2話は俺が海賊に加わった話です。」

コウタの場合

今は、感謝している。俺を赤色の戦士に引き合わせてくれた黄色の戦士に。

「あゝ私達の船を直して頂けませんでしょうか？」

お嬢様の服装を来た少女が俺の所に訪ねてきた。立ち振舞いはお嬢様といっても差し控えはないが、その仕草に違和感を覚える。どうやらネコをかぶっているようだ。そして、彼女の髪を観察する。そのクセのつき方からすると、ポニーテールか何か一房に纏めて縛っているようだ。それを踏まえて、彼女をもう一度観察する。それで、彼女の正体に気付いた。そこに手配書が貼ってあるからだ。彼女の素顔が描かれているからだ。

「……………今は、手が放せない。一時間以内に終わらせるから待つて欲しい。」

「わかったわ。」

彼女の了承に急いで、頼まれていた故障したものを修理して依頼主に返し、彼女の案内のもと赤い海賊船に連れて行ってもらった。

そこで見たものは信じられないようなものだった。色々なものがあるところ狭しと乱雑している。ゴミ袋には燃えるもの燃えないもの関係なく入れられている。とどめに机の上にはピザの宅配の箱が。それを見た瞬間、何か切れたような気がする。そして、気がついたら、既に部屋の片づけを始めていた。それで気付いたが、隅っこは拭かれておらず埃が溜まっていた。

「部屋を散らかすな！四角い部屋を丸く拭いたら隅っこが汚れたまままだ！ゴミはちゃんと分別する！そして、栄養をちゃんと考えて食べる！」

そう言うってから、机の上のピザの箱を片してから、食事を振る舞った。

「……………美味しいよ。」

「ほんとだ。すごくおいしい。」

おいしいと言いながら食べてくれる海賊達。その光景に頬が緩むが、直ぐにここに来た目的を思い出した。

「……………この船が壊れているって聞いたけど何処が壊れている？」

「ああ。ごめん。そのメインコンピューターがイカれてて。」

言われたものを確認してみたら単に電源が落とされていたらしい。ちよつといじっただけですぐに復旧した。

「おおーやるじゃん！」

「大した腕だね。」

二人の少女の言葉に気恥ずかしく感じてしまっなか、赤いコート
の少年が問いかける。

「君の名前は？」

「コウ」「ハカセでいいんじゃないかな？それっぽいし」「

それは名前じゃない。

「それもそうだね。」

それで納得しないで欲しい。

「よろしくハカセ。」

「よろしく頼むね。ハカセ。」

「よろしくハカセ。」

「よろしくよろしく。」

鉄で出来た鳥がしきりにそう言った。それが俺、コウタツチヤ
が海賊に加わった瞬間だった。

亮の場合（前書き）

感想いただきました、鳴神 ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

亮「次はゴォ〜カイシルバーの須川亮の話です。」

亮の場合

気ままに散歩をしていた時、視界に女の子が、道路の反対側に咲いている花を取ろうとしているのが写った。さらに女の子に気づいていない車が走っていることも。

「危ない!!」

叫んでから女の子を助けようと、駆け寄る。間一髪で、成功して女の子を抱えて、反対側の車道に転がる。だが、どこかに打ち付けたのかこめかみから血を流していた。

「……………大丈夫かい？」

女の子にそう問いかけようとして、俺の意識は闇に落ちた。

「……………亮。……………亮。」

俺を起こそうとする声に目を覚まし、辺りを確認する。そこは遺跡のようなものが並ぶところだった。そこに3人の戦士がいた。

「あなたはジュウレンジャーのドラゴンレンジャーさんにタイムレンジャーのタイムファイヤーさんにアバレンジャーのアバレキラーさん？」

「よく知っているな？俺達の事を？」

「基本的なことです。それより、あなた達がここにいてってことは俺はもう死んでいるんですね？」

そう問いかけながら、落ち込んでいた。この世にいるはずの無い戦士達がここにいる。その無言の答えがさらに気を重くしてしまつた。畜生。アイツを幸せにするって約束したのに。

「フツこんなときでも、他人の事が心配なのか？だが、そんなお前に久しぶりにときめいたぜ。」

アバレキラさんはそう言ってから、携帯のようなものと、人形みたいでその下半身にカギが隠されているものを渡した。

「それはゴーカイセルラーとレンジャーキーだ。ザンギャックがまた動き始めようとしている。」

その言葉に俺の体は未だ生きているのだと理解できた。

「ドラゴンレンジャーさん。タイムファイヤーさん。アバレキラさん。あなた達の無念は俺が引き受けます！あなた達の方も正義のヒーローとして、がんばります！」

その言葉に3人の雰囲気や和らいだような気がした。

「いい返事だ。亮。お前に俺達の大いなる力を託す。俺達の方もがんばってくれ。」

その言葉を聞きながら俺の意識は遠くなっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4496z/>

お試し番 バカとテストと海賊

2011年12月16日01時48分発行